

総合心療センター 作業療法室

室長 山内 学

当部門について

本年度もスタッフの増減はなく、4名体制にて入院および外来作業療法に取り組んできました。スタッフは経験年数のあるベテラン層で構成されており、個々の臨床力を活かした安定した運営が可能となっています。一方で、多様な業務への対応や役割の拡大により、業務負担の増加が継続していることは痛感しています。

作業療法においては、治療的役割への期待は依然として高く、精神科急性期治療における回復促進や、外来移行・社会復帰に向けた支援の中核としての機能が求められています。感染対策の継続により、プログラム運営に大きな制限が生じています。活動内容や集団規模、実施方法に制約がある中で、活動性や表現力の向上、対人関係の改善といった本来の治療的効果を十分に引き出すことが難しい場面も多々見られています。また、効果の発現には一定の時間や実施回数が必要ですが、入院期間や環境制約の影響により、十分な介入に至らないケースも実感しています。

さらに、プログラム準備や教材作成などの間接業務の負担も大きく、限られた人的資源の中での効率的な運営が課題となっています。しかし、治療の進展や入退院を見据えた支援についてスタッフ間での意識が高まっており、ミーティングを重ねる中でアセスメントの共有や患者理解の深化、提供可能な支援内容の言語化が進んでいます。これにより、チームとしての方向性の統一と連携強化が図られていることは強みになっています。

一方で、環境要因に加え、患者層や疾患特性の影響によりプログラム参加者が少ない場面もあり、作業療法の提供に難しさが伴っています。そのような状況下においても、小集団での関わりや個別対応を柔軟に取り入れながら、継続的な支援を行っています。「あきらめないこと」「継続すること」「提供できるものは何？」を重視して運営しています。もちろん、他部門の理解とサポートを受けていることも大きな要因です。

また、精神科急性期治療病棟における回復度向上に向けた意識は他部門とも共有されており、連携のもとで支援を展開しています。外来作業療法については利用者の増加が見られており、今後はその定着に加え、次のステップへの移行支援を見据えた外来サポート体制の強化が課題です。

今後は、心理教育や集団力動を活用したプログラムの再構築・再開にも取り組む予定である。業務の多忙化は予測されるが、精神科作業療法の有効性を各部門と共有しながら、より質の高い治療と支援の提供に努めていくように心がけたいと考えています。